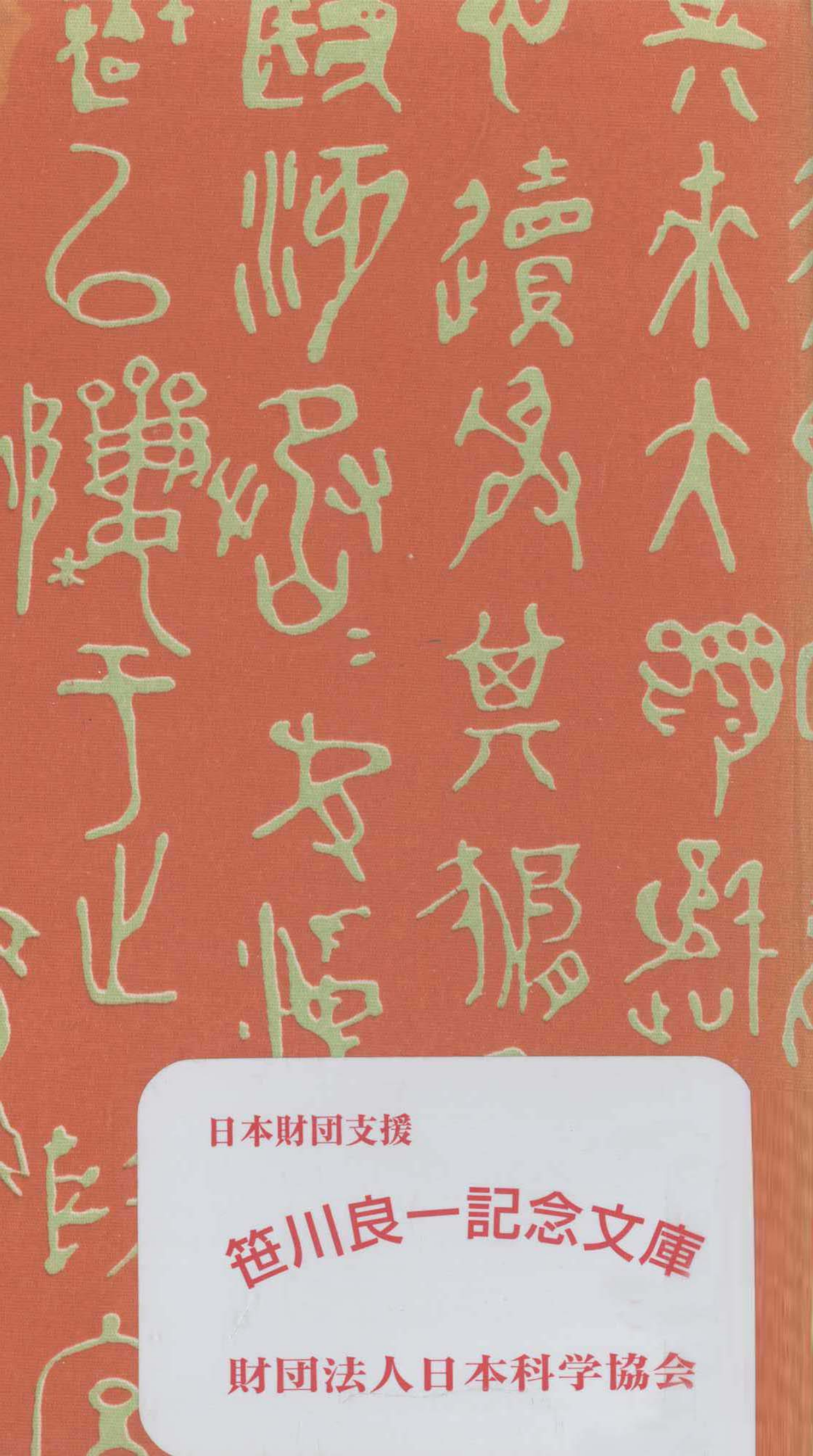


日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

漱石全集
第十七卷

小品

下

全三十四卷　第十六回配本

昭和三十二年一月十二日　第一刷發行　©　漱石全集　第十七卷

定價　一五〇圓

著者　夏目漱石

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎

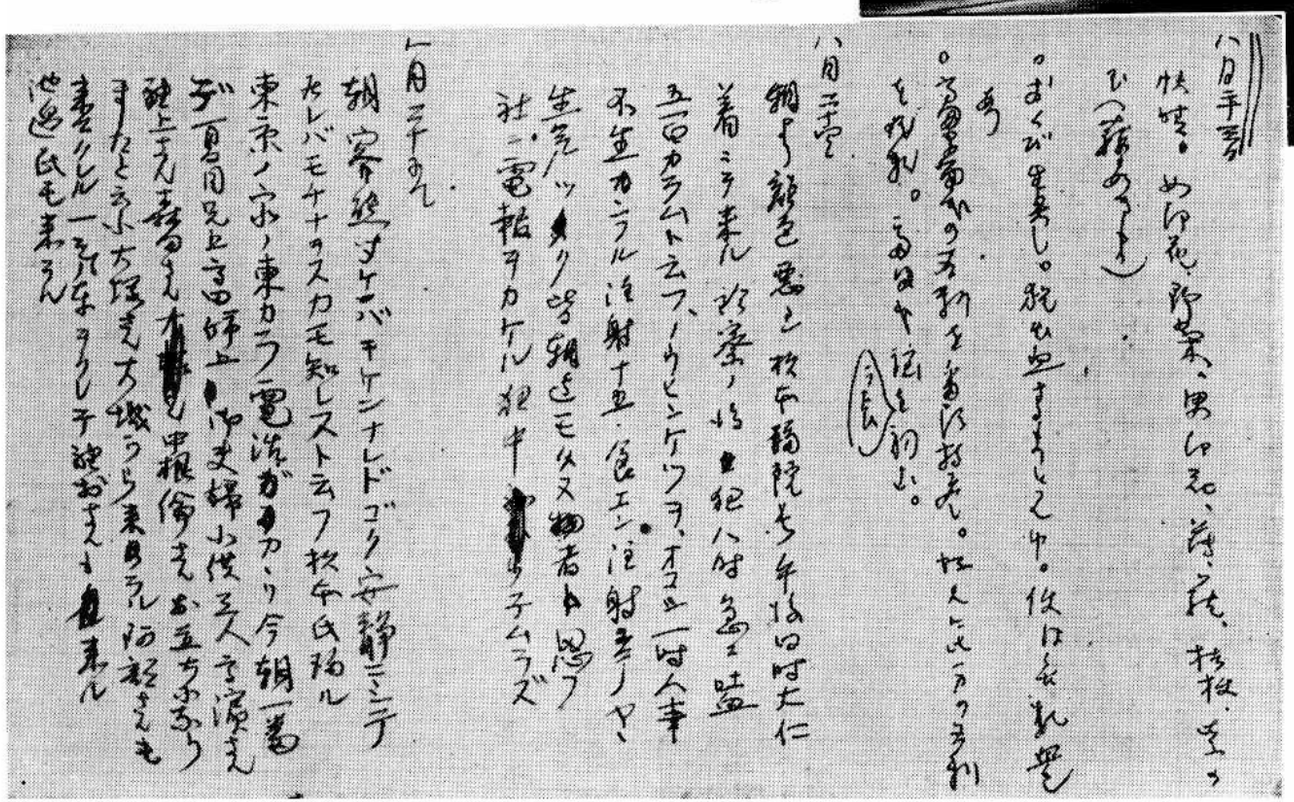
東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

修善寺大患の部屋（菊屋）



修善寺日記の一節

目次

思ひ出す事など　五
子規の畫　八三
ケーベル先生　八六
變な音　九一
手紙　九七
三山居士　一一三
初秋の一日　一一六
ケーベル先生の告別　一一九
戰爭から來た行違ひ　一二三
硝子戸の中　一二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

注　解　一九九
解　說　二一

小

品

下

思ひ出す事など

一

漸くの事で又病院迄歸つて來た。思ひ出すと此處で暑い朝夕を送つたのも最早三ケ月の昔になる。其頃は二階の廂から六尺に餘る程の長い葭簀を日除に差し出して、熱りの强い緣側を幾分か暗くしてあつた。其緣側に是公から貰つた楓の盆栽と、時々人の見舞に持つて來て呉れる草花抔を置いて、退屈も凌ぎ暑さも紛らして居た。向に見える高い宿屋の物干に眞裸の男が二人出て、日盛を事ともせず、欄干の上を危なく渡つたり、又は細長い横木の上にわざと仰向に寢たりして、巫山戯廻る樣子を見て自分も何時か一度はもう一遍あんな逞しい體格になつて見たいと羨んだ事もあつた。今は凡てが過去に化して仕舞つた。再び眼の前に現れぬと云ふ不慥な點に於て、夢と同じく果敢ない過去である。

病院を出る時の余は醫師の勸めに從つて轉地する覺悟はあつた。けれども、轉地先で再度の病に罹つて、寐たまゝ東京へ戻つて來ようとは思はなかつた。東京へ戻つてもすぐ自分の家の門は潜らずに釣臺に乘つたまゝ、又當時の病院に落ち付く運命にならうとは猶更思ひ掛けなかつた。

歸る日は立つ修善寺も雨、着く東京も雨であつた。扶けられて汽車を下りるときわざ〳〵出迎へて呉れた人の顏は半分も眼に入らなかつた。目禮をする事の出來たのは其中の二三に過ぎなかつた。思ふ程の會釋もならないうちに余は早く釣臺の上に横へられてゐた。黄昏の雨を防ぐ爲に釣臺には桐油を掛けた。余は坑の

底に寐かされた様な心持で、時々暗い中で眼を開いた。鼻には桐油の臭がした。耳には桐油を撲つ雨の音と、釣臺に付添うて來るらしい人の聲が微かながらとぎれ〳〵に聞えた。けれども眼には何物も映らなかつた。汽車の中で森成さんが枕元の信玄袋の口に挿し込んで吳れた大きな野菊の枝は、降りる混雜の際に折れて仕舞つたらう。

釣臺に野菊も見えぬ桐油哉

是は其時の光景を後から十七字にちゞめたものである。余は此釣臺に乘つた儘病院の二階へ舁き上げられて、三ケ月前に親しんだ白いベッドの上に、安らかに瘠せた手足を延べた。雨の音の多い靜かな夜であつた。余の病室のある棟には患者が三四名しか居ないので、人聲も自然絶え勝に、秋は修善寺よりも却つてひつそりしてゐた。

此靜かな宵を心地よく白い毛布の中に二時間程送つた時、余は看護婦から二通の電報を受取つた。一通を開けて見ると「無事御歸京を祝す」と書いてあつた。さうして其差出人は滿洲に居る中村是公であつた。他の一通を開けて見ると、矢張り無事御歸京を祝すと云ふ文句で、前のと一字の相違もなかつた。余は平凡ながら此の暗合を面白く眺めつゝ、誰が打つて吳れたのだらうと考へて差出人の名前を見た。所がステトとある許で一向に要領を得なかつた。たゞ掛けた局が名古屋とあるので漸く判斷が付いた。ステトと云ふのは、鈴木禎次と鈴木時子の頭文字を組み合はしたもので、妻の妹と其夫の事であつた。余は二ツの電報を折り重ねて、明朝又來るべき妻の顏を見たら、先づ此話をしようかと思ひ定めた。

病室は疊も青かつた。襖も張り易へてあつた。壁も新に塗つた許であつた。萬居心よく整つてゐた。杉本副院長が再度修善寺へ診察に來た時、疊替をして待つ

てゐますと妻に云ひ置かれた言葉をすぐに思ひ出した程奇麗である。其約束の日から指を折つて勘定して見ると、既に十六七日目になる。青い疊も大分久しく人を待つたらしい。

思ひけり既に幾夜の蟋蟀

其夜から余は當分又此病院を第二の家とする事にした。

二

病院に歸り着いた十一日の晩、回診の後藤さんに此頃院長の御病氣は何うですかと聞いたら、えゝ一仕切は大分好い方でしたが、近來又少し寒くなつたものですから……と云ふ答だつたので、余は何うぞ御逢ひの節は宜しくと挨拶した。其晩はそれ限何の氣も付かずに寐て仕舞つた。すると明日の朝妻が來て枕元に坐るや否や、實は貴方に隱して居りましたが長與さんは先月五日に亡くなられました。葬式には東さんに代理を頼みました。惡くなつたのは八月末丁度貴方の危篤だつた時分ですと云ふ。余は此時始めて附添のものが、院長の訃をことさらに秘して、余に告げなかつた事と、又其告げなかつた意味とを悟つた。さうして生き殘る自分やら、死んだ院長やらを兎角に比較して、少時は茫然とした儘默つてゐた。

院長は今年の春から具合が惡かつたので、此前入院した時にも六週間の間つひぞ顏を見合せた事がなかつた。余の病氣の由を聞いて、夫は殘念だ、自分が健康でさへあれば治療に盡力して上げるのにと云ふ言傳があつた。其後も副院長を通じて、よろしくと云ふ言傳が時々あつた。

修善寺で病氣がぶり返して、社から見舞のため森成さんを特別に頼んで呉れた時、着いた森成さんが、病院の都合上とても長くはと云つてゐる其晩に、院長は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わざ〳〵直接森成さんに電報を打つて、出來る丈余の便宜を計らつて呉れた。其文句は寐てゐる余の目には無論觸れなかつた。けれども枕元にゐる雪鳥君から聞いた其文句の音丈は、未だに好意の記憶として余の耳に殘つてゐる。それは當分其地に留まり、充分看護に心を盡くすべしとか云ふ、森成さんに取つては隨分嚴かに聞える命令的なものであつた。

院長の容態が惡くなつたのは余の危篤に陷つたのと略同時ださうである。余が鮮血を多量に吐いて傍人から到底回復の見込がない樣に思はれた二三日後、森成さんが病院の用事だからと云つて、一寸東京へ歸つたのは、生前に一度院長に會ふためで、夫から十日程經つて、又病院の用事が出來て二度東京へ戻つたのは院長の葬式に列する爲であつたさうである。

當初から余に好意を表して、間接に治療上の心配をして呉れた院長は斯くの如く次第に死に近づきつゝある間に、余は不思議にも命の幅の縮まつて殆んど絹糸の如く細くなつた上を、漸く無難に通り越した。院長の死が一基の墓標で永く確められたとき、辛抱强く骨の上に絡み付いてゐて呉れた余の命の根は、辛うじて冷たい骨の周圍に、血の通ふ新しい細胞を營み初めた。院長の墓の前に供へられる花が、幾度か枯れ、幾度か代つて、萩、桔梗、女郎花から白菊と黃菊に秋を進んで來た一ケ月餘の後、余は又其一ケ月餘の間に盛返し得る程の血潮を皮下に盛得て、再び院長の建てた此胃腸病院に歸つて來た。さうして其間いまだ曾て院長の死んだと云ふ事を知らなかつた。歸る明る朝妻が來て實は是々でと話をする迄、院長は余の病氣の經過を東京にゐて承知してゐるものと信じてゐた。さうして回復の上病院を出たら禮にでも行かうと思つてゐた。もし病院で會へたら篤く謝意でも述べやうと思つてゐた。

逝く人に留まる人に來る雁

考へると余が無事に東京まで歸れたのは天幸である。斯うなるのが當り前の様に思ふのは、未だに生きてゐるからの惡度胸に過ぎない。生き延びた自分丈を頭に置かずに、命の綱を踏み外した人の有様も思ひ浮べて、幸福な自分と照らし合せて見ないと、わが難有さも分らない、人の氣の毒さも分らない。

たゞ一羽來る夜ありけり月の雁

三

ジエームス教授の訃に接したのは長與院長の死を耳にした明日の朝である。新着の外國雜誌を手にして、五六頁繰つて行くうちに、不圖教授の名前が眼に留つたので、又新らしい著書でも公けにしたのか知らんと思ひながら讀んで見ると、意外にもそれが永眠の報道であつた。その雜誌は九月初めのもので、項中には去る日曜日に六十九歳を以て逝かるとあるから、指を折つて勘定して見ると、丁度院長の容體が次第に惡い方へ傾いて、傍のものが晝夜眉を顰めてゐる頃である。又余が多量の血を一度に失つて、死生の境に彷徨してゐた頃である。思ふに教授の呼息を引き取つたのは、恐らく余の命が、瘠せこけた手頸に、有るとも無いとも片付かない脈を打たして、看護の人をはら〳〵させてゐた日であらう。

教授の最後の著書「多元的宇宙」を讀み出したのは今年の夏の事である。修善寺へ立つとき、向へ持つて行つて讀み殘した分を片付けやうと思つて、それを五六卷の書物とともに鞄の中に入れた。所が着いた明日から心持が惡くて、出歩く事もならない始末になつた。けれども宿の二階に寐轉びながら、一日二日は少しづゝでも前の續きを讀む事が出來た。無論病勢の募るに伴れて讀書は全く廢さなければならなくなつたので、教授の死ぬ日迄教授の書を再び手に取る機會はなかつ

た。

病牀にありながら、三たび教授の多元的宇宙を取り上げたのは、教授が死んでから幾日目になるだらう。今から顧みると當時の余は恐ろしく衰弱してゐた。仰向に寐て、兩方の肘を蒲團に支へて、あの位の本を持ち應へてゐるのに隨分と骨が折れた。五分と經たないうちに、貧血の結果手が痲痹れるので、持ち直して見たり、甲を撫でゝ見たりした。けれども頭は比較的疲れてゐなかつたと見えて、書いてある事は苦もなく會得が出來た。頭丈はもう使へるなと云ふ自信の出たのは大吐血以後此時が始てであつた。嬉しいので、妻を呼んで、身體の割に頭は丈夫なものだねと云つて譯を話すと、妻が一體貴方の頭は丈夫過ぎます。あの危篤かつた二三日の間抔は取り扱ひ惡くて大變弱らせられましたと答へた。

多元的宇宙は約半分程殘つてゐたのを、三日許で面白く讀み了つた。ことに文學者たる自分の立場から見て、教授が何事によらず具體的の事實を土臺として、類推で哲學の領分に切り込んで行く所を面白く讀み了つた。余はあながちに辯證法を嫌ふものではない。又妄りに理知主義を厭ひもしない。たゞ自分の平生文學上に抱いてゐる意見と、教授の哲學に就いて主張する所の考とが、親しい氣脈を通じて彼此相倚る樣な心持がしたのを愉快に思つたのである。ことに教授が佛蘭西の學者ベルグソンの說を紹介する邊りを、坂に車を轉がす樣な勢で馳け拔けたのは、まだ血液の充分に通ひもせぬ余の頭に取つて、どの位嬉しかつたか分らない。余が教授の文章にいたく推服したのは此時である。

今でも覺えてゐる。一間置いて隣にゐる東君をわざ〳〵枕元へ呼んで、ジェームスは實に能文家だと教へる樣に云つて聞かした。其時東君は別に是といふ明瞭

な答をしなかつたので、余は、君、西洋人の書物を讀んで、此人のは流暢だとか、彼人のは細緻だとか、凡て特色のある所がその書き振りで、讀みながら解るかいと失敬な事を問ひ糺した。

教授の兄弟にあたるヘンリーは、有名な小説家で、非常に難澁な文章を書く男である。ヘンリーは哲學の様な小説を書き、キリアムは小説の様な哲學を書く、と世間で云はれてゐる位ヘンリーは讀みづらく、又其位教授は讀み易くて明快なのである。――病中の日記を檢べて見ると九月二十三日の部に、「午前ジェームスを讀み了る。好い本を讀んだと思ふ」と覺束ない文字で認めてある。名前や標題に欺されて下らない本を讀んだ時程殘念な事はない。此日記は正に此裏を云つたものである。

余の病氣に就て治療上色々好意を表してくれた長與病院長は、余の知らない間にいつか死んでゐた。余の病中に、空漠なる余の頭に陸離の光彩を拋げ込んでくれたジェームス教授も余の知らない間にいつか死んでゐた。二人に謝すべき余はたゞ一人生き殘つてゐる。

菊の雨われに閑ある病哉
菊の色緣に未し此晨

（ジェームス教授の哲學思想が、文學の方面より見て、どう面白いかこゝに詳說する餘地がないのは余の遺憾とする所である。又教授の深く推賞したベルグソンの著書のうち第一卷は昨今漸く英譯になつてゾンネンシャインから出版された。其標題は Time and Free Will（時と自由意思）と名づけてある。著者の立場は無論故教授と同じく反理知派である。）

四

病の重かつた時は、固より其日々々に生きてゐた。

さうして其日々々に變つて行つた。自分にもわが心の水の様に流れ去る様がよく分つた。自白すれば雲と同じく且つ去り且つ來るわが腦裡の現象は、極めて平凡なものであつた。それも自覺してゐた。生涯に一度か二度の大患に相應する程の深さも厚さもない經驗を、恥とも思はず無邪氣に重ねつゝ移つて行くうちに、夫でも他日の參考に日毎の心を日毎に書いて置く事が出來たならと思ひ出した。其時の余は無論手が利かなかつた。しかも日は容易に暮れ容易に明けた。さうして余の頭を掠めて去る心の波紋は、隨つて起るかと思へば隨つて消えて仕舞つた。余は薄ぼけて微かに遠きに行くわが記憶の影を眺めては、寐ながらそれを呼び返したいやうな心持がした。ミュンステルベルグと云ふ學者の家に賊が入つた引合で、他日彼が法庭へ呼び出されたとき、彼の陳述は殆んど事實に相違する事許であつたと云ふ話がある。正確を旨とする几帳面な學者の記憶でも、記憶は是程に不慥なものである。「思ひ出す事など」の中に思ひ出す事が、日を經れば經るに從つて色彩を失ふのは勿論である。

わが手の利かぬ先にわが失へるものは既に多い。わが手筆を持つの力を得てより逸するもの亦少からずと云つても嘘にはならない。わが病氣の經過と、病氣の經過に伴れて起る内面の生活とを、不秩序ながら斷片的にも叙して置きたいと思ひ立つたのは是が爲である。友人のうちには、もう夫程好くなつたかと喜んで吳れたものもある。或は又あんな輕擧をして遣り損なはなければ可いがと心配して吳れたものもある。

其中で一番苦い顔をしたのは池邊三山君であつた。余が原稿を書いたと聞くや否や、忽ち餘計な事だと叱り付けた。しかも其聲は尤も無愛想な聲であつた。醫者の許可を得たのだから、普通の人の退屈凌ぎ位な所と見たらよからうと余は辯解した。醫者の許可も去る

事だが、友人の許可を得なければ不可んと云ふのが三山君の挨拶であつた。それから二三日して三山君が宮本博士に會つて此話をすると、博士は、成程退屈をすると胃に酸が湧く恐れがあるから却つて惡いだらうと調停して呉れたので、余は漸く助かつた。

其時余は三山君に、

遺却新詩無處尋。　嗒然隔牖對遙林。
斜陽滿徑照僧遠。　黄葉一村藏寺深。
懸偈壁間焚佛意。　見雲天上抱琴心。
人間至樂江湖老。　犬吠鷄鳴共好音。

と云ふ詩を遺つた。巧拙は論外として、病院に居る余が窓から寺を望む譯もなし、又室内に琴を置く必要もないから、此詩は全くの實況に反してゐるには違ないが、たゞ當時の余の心持を咏じたものとしては頗る恰好である。宮本博士が退屈をすると酸がたまると云つた如く、忙殺されて酸が出過ぎる事も、余は親しく經驗してゐる。詮ずる所、人間は閑適の境界に立たなくては不幸だと思ふので、其閑適を少時なりとも貪り得る今の身の嬉しさが、此五十六字に形を變じたのである。

尤も趣から云へばまことに舊い趣である。何の奇もなく、何の新もないと云つても可い。實際ゴルキーでも、アンドレーフでも、イブセンでもショウでもない。其代り此趣は彼等作家の未だ嘗て知らざる興味に屬してゐる。又彼等の決して與からざる境地に存してゐる。現今の吾等が苦しい實生活に取り卷かれる如く、現今の吾等が苦しい文學に取り付かれるのも、已を得ざる悲しき事實ではあるが、所謂「現代的氣風」に煽られて、三百六十五日の間、傍目も振らず、しかく人世を觀じたら、人世は定めし窮屈で且つ殺風景なものだらう。たまにはこんな古風の趣が却つて一段の新意を吾等の内面生活上に放射するかも知れない。余は病

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com